

受精

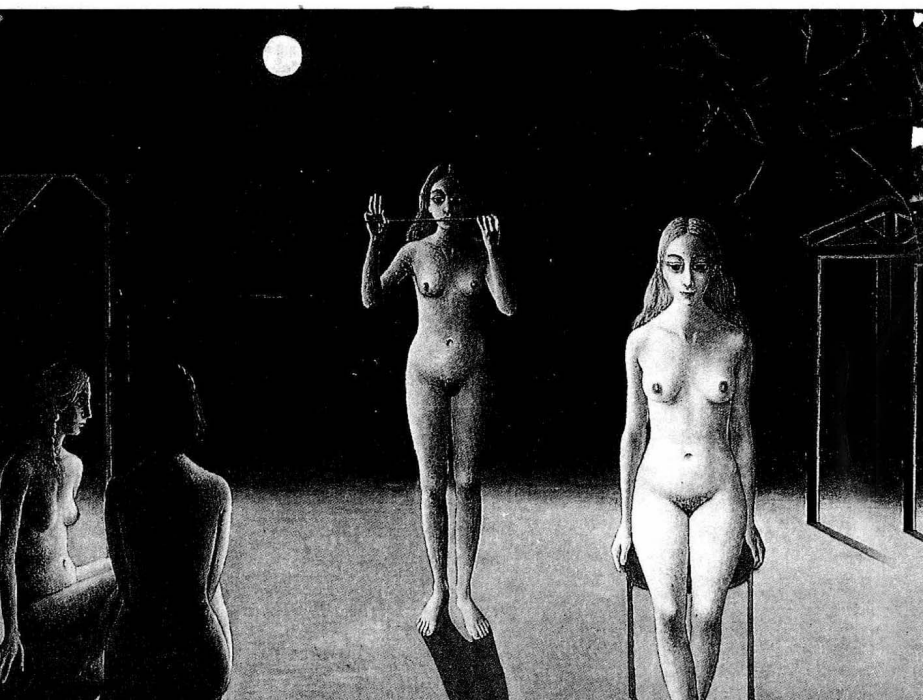
Conception

帚木蓬生

生蓬木帚
Hōsei Hahakigi

精

角川書店



帯木蓬生（ははきぎ・ほうせい）

1947年、福岡県生れ。東大仏文卒業後、TBS勤務ののち、
九大医学部卒業。現在、精神科医。

93年、『三たびの海峡』で吉川英治文学新人賞受賞、

95年、『閉鎖病棟』で山本周五郎賞受賞、

97年、『逃亡』で柴田錬三郎賞受賞。

受 精——Conception——

1998年 6月25日 初版発行

1998年 7月30日 三版発行

著 者——帯木蓬生

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店



〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3

振替 00130-9-195208

Phone：営業部▶03-3238-8521

編集部▶03-3238-8451

印刷所——株式会社 厚德社

製本所——株式会社 宮田製本所

●落丁・乱丁本はご面倒でも小社営業部サービスセンター宛に
お送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。

© 1998 Hōsei HAHAKIGI Printed in Japan

ISBN4-04-873110-6 C0093

Conception
受精

吐く息が白く、毛糸の手袋の指がかじかむ。

口許に指先をもつてきて、息をかけると、白さは霧のようにあたりを散った。舞子は明生を思った。

あのとき蛾眉山の離れ湯まで降りて行く途中で、明生は不意に振り向き、抱きしめたのだ。互いの吐く息が混じりあい、舞子は明生の唇を受けとめた。目を閉じる直前、赤い椿の花が、庭灯の余光に浮かび上がった。

明生は口づけをする前に、何と言ったのだったか。

〈舞子さん好きだ〉〈舞子さんきれいだ〉それとも、単に〈愛している〉だったのか。

自分の耳が記憶していないのが恨めしい。

その代わり、離れ湯にはいつてからの光景はすべてを覚えていた。小さな裸電球に照らし出された湯の底にあった岩の石組みまで、思い出せそう。茶室のよな造りで、湯舟が一坪、洗い場は畳一枚くらいの広

さしがなく、軒下の窓からは、樹木の枝に積もった雪が見えた。湯は隅の岩の間から絶えず流れ落ち、〈飲めます〉という木札とともに、小さな竹びしゃくが置いてあった。

明生の前でそんなふうにな裸をさらすのは初めてだった。それまでは、明生のアパートでも別々に入浴し、抱かれるときでさえ明かりを消し、何かしら布をまわっていた。

しかしその湯殿では全裸こそが似つかわしく、一段高い所にある脱衣場に立ったとき、何の抵抗もなく羽織も浴衣も脱ぎ捨てたのだ。

湯舟の中では遠慮がちに離れていたのに、「背中を流してあげる」と言ったのは舞子のほうだった。明生は嬉しそうな顔で、勢いよく立ち上がり、洗い場のコンクリートの上にしゃがみ込んだ。舞子も上がり、タオルに石けんをすりこんで明生の背中に当てる。意外に力が必要することも初めて知った。「上手、上手」と言いながら明生は気持良さそうに背中を丸めた。身体全部を洗ってやろうと思ったのはそのときだ。

前にまわってかがみ、明生の首から胸、腕と洗った。明生は黙って、されるがままにしている。「立って」と舞子から言われて、先生に命じられた生徒のように

起立した。舞子は膝をついて、目の前の太股や臍にタオルをあてた。毛深くてまっすくの明生の脚は好きだった。膝の後ろにも手をまわしてこすった。もうそのときには、明生のものが逞しく突き出していた。舞子は自分でも知らないうちに、新たに手にした石けんをそこになすりつける。櫛の木と同じだと思った。舞子の指の力では微動だにしなかった。

右側の木立のなかでバサリと音がする。雪ほこりがたっていた。杉の枝に積もった雪が落ちたのだ。舞子は耳を澄ます。どこからか読経の声がしてくる。ひとりの声ではない。四、五人が唱和している声だ。

雪で覆われたゆるやかな石段。石段の両側に広がる杉木立のところどころに僧房があり、それぞれが独立した修行の場となっている。一般の参拝客は立ち入り禁止で、漏れ出る音で房内の様子を想像するしかない。石段の雪には足跡がなかった。屋根に積もった雪との対照が美しい、朱塗りの山門をくぐった境内も、同様に、人が歩いた形跡はない。

コートの手を合わせながら、足は自然に茶店の方角に向かっていた。茶店は閉まっていたが、その脇からの眺めはいつも見事だった。

かつて明生と一緒にその場に立ったとき、山裾から成沢一帯の稲田の広がり、真庭湖までが一望のもとに見おろせた。平野は黄色を呈し、山肌には燃えるような紅葉と銀杏が点在していて、時の経つのも忘れて見入った。

いま、山も野も無彩色のなかに沈んでいる。真庭湖でさえ、黒っぽいかたまりでしかない。

舞子は襟元に合わせた両手に息をかける。明生が湯殿で抱いてくれた雄々しさがよみがえった。あのとき明生は、泡のついたままの身体で舞子を抱きしめたのだ。洗い場の上に舞子を仰むけにし、好きだ好きだと言いながら乳房に口をつけた。揉みしだかれていくうちに、背中の下のセメントの硬さも、髪が濡れるのも気にならなくなった。櫛の棒のような明生の一部がはいってきた瞬間には、アーツと声を上げていた。

明生の背は泡でぬめった。尻も同じだった。触れ合った両脚だけに、ゴワゴワと毛深さを感じた。激しい動きに、言葉さえ割れ、身体全体が揺れ続けた。初めの絶頂が来たあとともそれはなかなか去らず、また新たな絶頂に襲われ、舞子は明生の名を呼んだ。気が遠くなるのをこらえていると、快感はよどみなく身体全体にいきわたり、自分が意識だけになったような気がし

た。

明生が何度か舞子の名を呼び、落葉が舞い落ちるように身体を預けてくると、自分はまだ湖になっていた。さざ波の立つ身体で明生を抱きしめた。

あれがちょうど一年前だ。身体はまだ明生の形と温もりをそっくり記憶している。

舞子は椿堂に向かう。ひと所に立っているのが苦しかった。自分がつけたブーツの足跡のそばに、逆向きの跡を延ばしていく。

銅板葺きの屋根が十センチほどの雪で包まれていた。まだつららも残っている。堂の左手にある椿は屋根の高さまで達して、無数の花をつけていた。葉上の雪と赤い花が色を競いあっている。

堂の正面は、左右に釣鐘の形をした火灯窓が配され、中央に二枚の戸がある。手をかけると、あっけなく手前に開いた。

中は薄暗かったが、白一色の外側に對して、くすんだ木目が氣持をなごませる。土間で足踏みをし、ブーツの雪を落とした。

暗がりに目が慣れてくるにつれて、仏像の輪郭が浮かび上がってくる。まるで舞子のために、奥の方から出てきたかのように、全身をさらけ出している。

不動明王は台座の上で跏趺坐していた。弁髪を左に垂らし、右目を見開き、左目は半ば閉じ、口を一字に結ぶ。右手で宝剣をまつすぐ支え持ち、軽く上げた左手には絹索を垂らしている。青黒く塗られた身体から発しているのは紅蓮の炎だ。

木彫でところどころ虫喰いのいたみがあるにもかかわらず、四肢体幹に漲る力と、火焰光に残る朱は周囲を威圧している。

「不動明王は大日如来のもうひとつの姿だよ」

この場に立つて、明生は言った。

舞子には初耳だった。寺はもとより、博物館にも稀にしか足を運ばないので、どの仏像も同じにしか見えない。しかし不動明王だけは別で、数ある他の仏像とは、炎に包まれた異形の顔相で一線を画していた。その不動明王が、優美な大日如来と同一人物であるのを知らされて、思わず明生に寄り添い、腕をとった。仏の世界が一拳に人の世界に近づいた気がした。

舞子は不動明王の左右に位置する童子の木像にも眼を移す。いずれも一メートルほどの高さで、初めの頃は朱や金で色付けされていたのだろうが、今では褪色して鉄錆色になっている。

左側の童子は、やんちゃな餓鬼大将といった感じだ。

捻れた棒を地面に斜めに突き立て、両手を重ね、その上に顎をのせてじっと前方を睨む。遠くからやって来る人間共を眺めながら、さてどんな意地悪をしてやるかなと思案しているような顔だ。

それとは全く対照的に、右にある童子はふくよかな表情で空を眺め、手を合わせている。いかにも子供らしい純真さと聡明さが出ている。不動明王の激しい炎と怒れる形相に接したあとでは、ほっとした気持になる。

明生と一緒に来た際も、舞子はこの童子に魅了された。明生には言わなかったが、結婚して子供を生むときはこんな子供をさずかりたいと内心で思い、ひとりで顔を赤らめてしまった。

明生がいなくなった今、もうそれは永遠にかなわなくなってしまった。

舞子は、不動明王を見、左側の童子に眼をやり、また右側の童子に見入る。涙が溢れてくる。身体から力が抜けていき、立っているのがやっとだ。また振り出しに戻っていた。

何度も立ち直ろうと思い、いろんなことをした。もつとも、初めの三カ月はどうやって過ごしたか記憶にない。会社には行き、机の上に並ぶ書類をワープロに

作成し直し、見積書の計算もした。残業にも応じた。よくも休まなかったと思う。休めば、アパートの中に閉じこもり、死ぬことしか頭に浮かんでこなかった。

これではいけないと思つて、月曜から金曜日までは歯をくいしばって出勤した。その代わり、土日はパジャマも脱がずに、ベッドの上で寝ていた。目を閉じているうちに電話が鳴ると、はっとして明生からではないかと手を伸ばし、もう明生はこの世にはいないのだと気づき、愕然とする。涙を拭きながら、電話の音が止むのを待った。

しばらくたつと、買物や料理もできるようになった。しかし、商店街の人混みのなかで、スーツ姿の明生を見かけたような錯覚にとらわれた。知らぬ間に、明生の好物だったカラシレンコンを買ったりした。そんなときには買物を続ける気も失せ、そそくさとアパートに帰った。悲しみは、赤く焼けた炭火のようにいつまでも残った。

何度その繰り返しだったろう。月日は経つても、自分はその悲しみの出発点から一步も動いていなかった。蛾眉山に登ってみようと思つたのも、あるいはまた歩き出せるかなと考えての果てだった。ベッドの脇に重ねておいた郵便物の中味にふと眼がいき、その気に

なつた。大判の一枚の絵葉書にすぎず、なぜそれが自分のもとに送られて来たかは分からない。明生の不幸があつて後に届いたもので、舞子はそのままゴミ箱に捨てるに忍びず、枕許に置いていた。ひとつはその山寺が、明生と一緒に訪れた場所であつたからであり、絵葉書の写真が美しかったからでもある。うつすらと雪の降つた朝に撮つたのだろうか、山の緑と雪の対比が美しく、その山腹に僧房と山門、堂塔などが、枯山水の中の石のように配置されている。そして、石上に「苦」と「悲」の文字が小さく刻印されていた。

葉書の宛先は正しく舞子の住所になつていた。明生と蛾眉山に登つたとき、どこかで記帳をしただろうかいやそんな覚えはない。しかしそれ以上はこたわらず、舞子は会社にて二日だけの年休を申し出て来てみたのだ。悲しみから遠ざかるうとして、やっぱり出発点に立ち戻つていた。――不動明王と二つの童子を前にして、そう思う。

後ろで声がした。人を驚かせるような声ではなく、暖かい風がふつと襟元をぬけるような人声だった。

「不動明王が気に入りましたか」

顔は逆光になつて判らなかつたが、頭髮を剃り上げた僧で、どこか日本語に癖があつた。

「はい。不動明王もいいですが、こちらの童子も好きです」

舞子は微笑しながら答える。僧衣の男性と口をきいたのは、生まれてこのかた初めてだ。

「そうでしょうね。あなたのようにどれかひとつ好きになつてももちろん構いませんが、三つをひとまとめにして見ていただくと、不動三尊像の面白味が分かります」

舞子はこのときはっきりと、目の前の僧が外国人であることを確信する。へありがたみ」と言わずに「面白味」という言い方をしたのだ。

案の定、窓から漏れる雪明かりに照らされた僧の顔は日本人ではなかつた。鼻が高く、目が窪み、口のまわりに細かい皺しわが刻まれている。年齢は七十歳前後だろうか。

「参拝する際、私共はまず左側の制吒せいたか童子に眼を奪われます。あのこちらを窺うような表情に、つい引き込まれるのです。そのあと、右側の矜羯羅こんがら童子の静かな合掌姿に眼が移り、そこでひと息つきます。可愛げな慈悲の心に溢れるお顔ですが、まだ未完成の慈悲心でしょう。そしていよいよ、上目づかに視線を上げると、不動明王の姿が立ち現れるのです」

僧は舞子の傍まで歩を進め、不動明王を見上げる。

しゃべるときの口の動きは外国人のそれではなく、日本人の口の開け方になっている。もしかしたら自分が生きた年月よりも彼のほうが日本滞在歴は長いのではないかと、舞子は思った。

「この怒りの形相こそ、慈悲の窮極の姿です。炎は一切衆生の煩惱を焼き尽くし、私共の菩提心を開発するのです」

「慈悲と怒りがどうして一緒になるのですか」

相手が日本人の僧なら訊いていなかったかもしれない。外国人であれば、何か言葉を見つけてくれそうな気がした。

「慈悲というのは、棒のようにじっと立っているものではありません。戦うものなのです。外に向かつては魔障を寄せつけず、内に向かつては煩惱を殺さねばなりません」

僧は言いやみ、舞子を見やった。「それにしても、こんな仏の恰好は嫌だと、あなたは思っているようですね」

「いいえ」

舞子は首を振る。「このお不動様の本当の姿が如来様だと思ふと、そのお氣持が分かる氣がします」

「知っていたのですか」

僧の口から意外だという驚きの声が漏れる。教えてくれたのは亡くなった恋人ですと、舞子は胸の内言う。涙がみるみるうちに溢れてきた。

僧は黙って舞子を見つめる。

「一緒に祈って進ぜましょう」

長い沈黙のあと、僧が言った。

木の柵を開き、中にはいる。草履を脱いで、不動明王の前に坐った。小机の中から炉といくつかの壺を取り出した。

僧は舞子には理解しにくい言葉を吐いて、何度かぬかずく。しかしそのあとの語句は抵抗なく耳にはいった。

——観想せよ、如来の心はこれ実相、実相はこれ智火、炉はこれ如来の身なり。火はこれ法身の智火なり。炉の口はすなわちこれ如来の口なり。

お経には全く外国訛りが無い。張りのある低い声が堂内いっぱい響き渡る。舞子は手を合わせた。

明生を思った。いつまでもあなたを忘れません。いえ、できることならあなたのもとに行きたい。あなたのいないこの世など、生きていても無益です。

あのときの予感はずしかった。明生の交通事故死を

聞いた瞬間、全身から血の気がひき、へ幸せはきのうまでで終わったのだ」と考えた。時間がそこを境にして変質していた。目が見、耳が聴き、手が触れるものすべてが無意味になっていた。

それはまだ続いている。おぞましいくらいに続いている。自分は生ける屍しかばねも同然だ。

恐る恐る目を開ける。僧の前にある炉に火が燃え盛っていた。僧はその炎の中に、経を唱えながら、小さな木片を投げ込んでいく。そのたびに火焰が揺れ、色に変化する。

香が堂内にたちこめていた。僧が投げた香木が燃えているのだろう。

目の前の紅蓮の炎と読経の声、たちこめる香に舞子は恍惚となる。

——想え、火天の御口より入って心蓮花台に至って微妙の供具となる。

——観せよ、この花、炉中に至って宝蓮花座となる。僧は床に額をこすりつける。舞子も合掌したまま閉眼した。身体が内側から熱くなっていく。まるで僧の唱える読経の声が、耳を通じて身体の中に燃えるものを投じていくかのようだ。

この読経がいつまでも続いて欲しい。この声と香の

なかに立ちつくしている限り、身のつらさを忘れられそうだ。激しいリズムの音楽に身をくねらせているのと似ている。いやオーケストラの演じる静かな曲に身を浸しているのと同じかもしれない。どちらも明生が行った。へゼッタ」というデイスコには明生が連れて行ってくれたし、ウィーン・フィルの演奏も一緒に聴いた。明生と向かい合って踊るだけで楽しく、明生の隣に坐って二時間、好きな音楽が聴けると思うだけで心が躍った。こういう時間がいつまでも続けばいいと願ったのだ。

読経が終わっている。僧が立って段を降り、草履をはき直した。

「ついて来なさい」

僧が言った。命令口調ではなかった。舞子は僧の背中を見ながら、堂の外に出る。

雪が美しい。鈍色どんじきの雲から白いかけらがこぼれるように落ちてきて、白一色の中に溶けこんでいく。雪のひとつかけらが光の色を宿している。光が姿をとどめるために、雪になったのだ。

僧は、後ろを振り返らずに歩く。素足に草履だが、踵かかとが雪に埋まっては消え、また立ち現れる。くるぶしが桃色に染まっていた。

鐘樓の横を通るとき、甘い香が匂った。舞子は立ち止まり、香の源を探した。やはり臘梅だ。まだ三分咲きくらいだろうが、白い雪をかぶりながらも、ひっそりと黄色い花びらを開いている。

「好きなんですわ。この花が」

まるで舞子の足音を聞いていたように、初めて僧が向き返った。

「はい。梅よりも早く咲いて、匂いも豊かですから」
臘梅が好きだったのは明生だ。冬に咲く花は何でも愛しいと、まるで年寄りみたいなことを言った。あれは、もう先行きが短い自分の命を予感していたのだらうか。

僧は舞子の顔をしばらく凝視していたが、また歩き出す。黒い僧衣の肩に雪がうつすらと積もっていた。

岩肌のむき出した断崖が、目の前にそびえていた。二百メートルくらいの上方から、滝が段差をつくって流れ落ちている。水量も豊かで、境内の見所のひとつになっている。千日回峰行の際、この滝の裏側を必ず通るのだと、案内板に記されていたのを読んだことがある。

僧はしかし、滝の方向には目もくれず、左側の建物に向かった。手前に門があり、木の扉が半開きになっ

ていた。立札には「用なき者、立入りを禁ず」と墨書してある。

僧は木扉を両側に大きく開いて、中に踏み込む。

「わたしもはいつていいのでしょうか」

舞子は訊いた。

「あなたは用ある者でしょう」

僧は笑った。

門の内側は中庭になっていて、灯籠が四基左右対称に立っている。奥の方に大きな堂があった。

障子を張った戸が閉ざされていて、内部は見えない。僧は雪の中庭に足を踏み込まずに、右側の回廊をたどった。三和土に雪が降り込んでいた。僧の足許で、細かい雪が埃のように舞う。

「ここで履き物を脱ぎましょう」

正面にまわり、石段を上がったところで言われた。ストッキングを通して触れた木の床は、しかし冷たくはなかった。ぶ厚い杉の板は、空気の温もりを吸い込んでいくかのように、ほんのりと暖かい。

二重の障子の内側にはいると、寒気が遠のく。部屋は三方が障子で、広さは二十畳か三十畳くらいはあるだろう。正面に金色のすだれがかかっていた。

障子とすだれの上にある壁と天井は、すべて仏像

の絵で埋めつくされている。曼陀羅まんだらを描いたものだろうか。一枚の絵ではなく、部屋いっぱいにあることからすれば、この空間そのものが曼陀羅ともいえた。

僧はすだれの手前に正座した。舞子も膝を折り、坐った。

「ここは何をするところなのですか」

二人の間にテーブルも小机もないので、奇妙な気がした。

「このすだれの奥で、お経をあげます」

僧はじつと舞子をみつめる。静かな視線と、どっしりと坐って動かない身体は、そのまま仏像のように見えた。

「一日、ここで読経をしていると、自分というものがなくなつてきます」

僧は微笑する。「この身体は確かにここに坐っているのですが、それも生きているのではなく、そのの燭台、そのすだれ、その柱と同じものになつてしまふのです。生も死もない——」

「生も死もない」

舞子は思わず復唱していた。

「そうです。生と死の境なんて、もともとないに等し

いのです。試しに、あなたの頭のなかには、生きているものだけがありますか」

僧は微笑したままの顔で訊いた。舞子は考えたあとかぶりを振る。頭を占拠しているのは明生の思い出だけだ。明生はこの世にはもういない。

「そうでしょう。頭のなかの意識というものには、生と死の区別がないのです。はじめから無なのです。あなたとこの私。この建物、外の雪。無です。夢そのものです」

「わたしが夢そのもの？」

「だって、夢は無そのものでしょう。あなたの夢を手にとつて、誰か他の人に示せますか。あなたの頭のなかだけの現象。再現性がない。誰か他の人があなたを夢のなかでみるかもしれない。逆にあなたが、誰か他の人を夢のなかでみることもあるでしょう。その夢のなかには生きた人も死んだ人も区別なく出てきます。この世というよりも夢のようなものなのです。つまり無です」

僧の顔から微笑が消えている。舞子は惹き寄せられるように僧の目を見つめた。

「無ですから、苦しみも悲しみもない。いや悲しみはあるかもしれませんが。無そのものに悲しみの味が秘め

られていますから。喜びさえも悲しみに包まれています。いや無や悲しみが外側を色どっているのです、すべてが喜びの色合を帯びてくるのです。白く降り積む雪鳥の声、岩清水の音、路傍の花——」

僧の優しい言葉づかいとは裏腹に、険しい表情が舞子の正面にあった。「逆に、無に裏打ちされない喜びなど、この世にはありません。万物の命は線香花火よりも短いし、笑いこけている劇場の床が抜けて、奈落に落ちる。それが人の世です」

舞子は頷く。あらゆる喜びと幸せにも結末があるという真実は、明生の死で証明済みだった。あの瞬間、すべてが停止した。舞台の明かりが消えたように、一瞬にして舞台が見えなくなった。しかもそれは一時の停電ではなく、永遠の停電なのだ。

「無に気づくことが苦しみをやわらげ、生きている喜びを増すのですか」

「そうです。その境地が読経によってたち現れるのです」

「わたしにはできません」

舞子は力なく首を振る。

「読経は僧がするものです。あなたのような方は、読経しなくてもその境地にたどりつくことができます」

簡単なことです。僧だから難しく、普通の人はたやすいのです」

まさか、と舞子は思う。僧が言うような高みに、俗世間にある人間が容易に到達できるなど考えられない。僧は舞子の疑問を見透かしたように言い継ぐ。

「ただひとつ、信じさえすればいいのです。衆生の人々は、その信じる心だけが命綱です。あとは何にもいりません。信じる素直な心があれば、修行を積み上げた僧と素手で太刀打ちができます」

「何を信じればいいのでしょうか」

「仏様です。一切の空を支えておられる仏様をです。仏様と言っても想像しにくければ、あなたがさっき見たお不動様でもいいのです。お不動様を通して仏様に近づけます。少しもむずかしくありません」

僧はまた微笑する。「そうすれば、ちょうど白黒の写真が反転するように、暗い世界が明るくなるのです。あなたがこの世で失った人々、あなたは、その人たちが、いま闇の中にいると思っているでしょう」

僧の問いに舞子は頷く。正座している足が痛くなつてよさそうなのに、どこにも苦痛を感じない。

「あの人たちは、闇のなかに葬り去られているのではないのです。ここに今も生きています。あなたが気づ

かないだけです。あの人たちはあなたを見、あなたに話しかけているのに」

舞子はほとんど失神しそうになっていた。明生がどこかにいて、自分に語りかけているなんて。

明生に会えるのなら、自分はどんなことだつてする。「いつでもおいでなさい」

突然、僧は話を打ち切るように言った。「一年間、休みをとることはできませんか」

「会社を休むのですか」

「そうです。いうなれば出家ですが、一年後には還俗（げんぞく）できます。あなたは何年生きてこられましたか」

「二十四歳になりました」

「その齢で一年間、人生の小休止をするのは、素晴らしいと思いますよ。その後の人生がとてつもなく価値あるものになります」

その後の人生などどうでもよかった。明生を見ることができ、感じられ、その声を聞ければ充分なのだ。

「お金のことなど心配はいりません。仏様におつかえするので。あなた^{からだ}の信じる意志と身体ひとつで山門をくぐつて来なさい」

僧は立ち上がる。舞子の坐っている正面の障子を開けた。

八枚くらいはある障子を、まるでスクリーンのように左右に滑らせると、さらに廊下の先に雨戸があった。一枚が幅一間分はある大きな戸だったが、僧が手をかけると、右側の方向に、いとも簡単に動き、すべて戸袋の中におさまっていく。

見事な雪景色だった。僧が招いたので、舞子は近寄り、廊下の手前で坐った。

岩と黄色がかつた土塀だけの庭だ。一面に雪が積もっているのに、枯山水なのか、苔庭なのかは判らない。しかし目の前には三色しかない。岩と土塀の瓦の原色、その上に敷きつめる白い雪。二つの無彩色を切り裂くように、黄橙（きだいだい）の色が高さ一メートルで横に走る。簡素きわまりない抽象画であり彫刻だ。

もう気持は定まっていた。

2

朝七時にアパートを出て、勤め先には八時少し前に着く。まだ誰も来ていない。ヤカンをコンロにかけ、コピー機のスイッチを入れる。その間に室内の床を掃

く。机の上も軽く雑巾がけしてやる。社員は二十名いるが、事務関係はそのうち五分の一で、あとは現場担当などで、一日顔を見せないこともある。

母方の遠縁にあたる社長が一代で築きあげた内装会社が、不況のなかでも倒れずに生き抜いてこれたのは、事業を抜げない手堅い方針のおかげだ。扱うのはビルの配管工事が主体で、注文主はホテルが多かった。とくにミヤコ・ホテルは、その揺籃期からの得意先だ。大きくなって系列ホテルをもつようになってからも、水まわり関係の仕事は一手に任せてくれている。それほど仕事の出来上がりがいいという証拠には違いない。ミヤコ・ホテルからの注文には社長自身が出向いて陣頭指揮をとる。客室の水漏れや配管変更のため、夜間作業になることが多い。それでも他の注文を後回しにしてでも仕上げてしまう。ミヤコ・ホテル受注工事の魅力は、何と言っても工事完了時の現金決済で、これは他のどの取引先でもやってくれない芸当だ。

高校を出て二年間専門学校に通い、ワープロと経理を習った。就職先を探していたとき、母がこの会社で事務員を募集していると知らせてくれた。母の伯父^{おじ}のいとこなにかで、遠縁ではあるが、他人に少しばかり毛がはえた程度としか自分では思われなかった。ひ

とり採用するのに十人も求職者が来て、そのなかには四年制大学を出た子もいたそうだ。そんな難関をパスしたのだから、縁故採用なのかもしれない。給料は、アパートを借りて自炊し、母にも小遣いを送り、自分の身のまわりも飾れるくらいには、出してくれた。

舞子が就職するまで、その会社ではワープロなどなかったのだが、社長の鶴の一声でさっそく富士通の機械がはいった。機器の選択も舞子に任せてくれた。但し、予算は小さく、企業用のものは買えなかった。

ワープロがはいると、それまで各自が手書きにしていた書類が、持ち込まれるようになった。見積書を出すのに、手書き文書だと受けつけない会社もあって、是非とも頼むと言われ、引き受けると、加速度的に作業量が増えた。まるでワープロ専属の事務員だ。肚^{はら}を決めて、見積書や請求書、報告書など、書式を決めて簡素化し、仕事がしやすいようにした。いうなれば、他の大きな企業がとつきの昔にやっていたオフィス革命の小型版を、二十年遅れでやったようなものだ。その分、社長には感謝された。

会社には、それまで女性事務員はひとりしかいなかった。社長の二号さんで六十代半ば、経理を一手にひき受けていて、社員はひそかに「五十万婆さん」と陰